

日英多義語の認知意味論的分析：
「クウ(食う)」と“to eat”

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10544

日英多義語の認知意味論的分析

—「クウ（食う）」と“to eat”—

皆 島 博*

(2018年9月26日 受付)

内容要約 本論は、認知意味論の理論的枠組みにおいて、日本語の多義動詞「クウ（食う）」とそれに対応する英語の多義動詞“to eat”の多義構造を分析する。また、日英対照言語学の観点から、両語の意味における類似点と相違点についても明らかにする。

キーワード：多義語，多義性，意味拡張，認知意味論，日英対照言語学

1. はじめに

本論では、日本語の動詞「クウ（食う）」と英語の動詞“to eat”を取り上げ、その多義構造と意味拡張の動機付けについて、認知意味論を理論的枠組みとして、日英対照言語学的な分析を行う。「クウ」と“to eat”は「食物を食べる」という、人間が日常的に普通に行う行為を描写する基本的な動詞¹⁾であるが、それぞれ次のような複数の意味で用いられる点で多義的といえる：

- (1) a. 昼飯を食う（＝食事する）
b. 相手の縄張りを食う（＝奪取する）
c. 優勝候補のA校を食う（＝圧倒する）
d. ガソリンを食う車（＝浪費する）
- (2) a. What did you eat for breakfast?（＝食事する）
（朝ごはんは何を食べましたか）

*福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

- b. The insect ate the peach hollow. (=かじる)
 (虫が桃に穴を空けました)
- c. An old car eats gas. (=浪費する)
 (古い車はガソリンを食います)
- d. What is eating you? (=憔悴させる)
 (何を悩んでいるのですか)

認知意味論では、上のような「クウ」と“to eat”が提示するさまざまな意味は無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（＝基本義）を出発点として、なんらかの認知的動機付け（メタファー、メトニミー、シネクドキ）によって意味拡張を展開し、相互に関連性のある意味と意味とのネットワーク、すなわち、放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。本論の目的は、「クウ」と“to eat”に関して、次の4点について、認知意味論の立場から記述を行い、それらを明らかにすることである。

- ① 「クウ」と“to eat”の複数の意味（語義）の区別
- ② 「クウ」と“to eat”の基本義（プロトタイプの意味）の仮定
- ③ 「クウ」と“to eat”の意味拡張の動機付け（メタファー、メトニミー、シネクドキ）の認定
- ④ 「クウ」と“to eat”の多義構造における類似点と相違点の指摘

2. 放射状カテゴリーとしての多義語

認知意味論では、人間を、意味を読み取り、意味を発信する主体とみなし、「意味」については、人間の身体性（感覚・知覚・認知など）の総合的な営みを通じて概念化されたものとする。そして、概念化することはカテゴリー化（範疇化）することと同じであるという立場を取る。

カテゴリー化とは、現実世界に存在するさまざまなモノをグループ分け（分類）して、ひとまとめにして捉える心の働き（認知）をいう。認知意味論以前（アリストテレスの時代）の古典的カテゴリー観では、カテゴリーのすべてのメンバーがメンバーであるための必要十分条件を満たす集合と定義され、他のカテゴリーとの境界線も明確なものと考えられていた。これに対して、認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーのメンバーの必要十分要件は、[+（プラス）]か[-（マイナス）]かの二項対立に基づいて決定されるものではない。むしろ、カテゴリーのメンバーの間には中心的なものと同期的なものとの区別が存在するだけで、カテゴリーとカテゴリーの間には明確な境界線は存在しないと考える。認知意味論では、カテゴリーには次のような特徴があることが提案されている（Wittgenstein 1978；Labov 1973；Rosch 1975；Lakoff 1987）：

- ① カテゴリーのメンバーは家族的類似を示す

- ② カテゴリーのメンバーには典型的事例が存在する
- ③ カテゴリーのメンバーはプロトタイプ効果を示す

まず、「家族的類似」とは、カテゴリーの全メンバーは共通の性質を持っているわけではないが、各メンバーが部分的にどこかで共通の性質を持つことによって、カテゴリー全体の統一性が保たれていることをいう。次に、「典型的事例」とは、カテゴリーのメンバーの中には、最もわかりやすい例、つまり、代表的なメンバーであるプロトタイプが存在することをいう。最後に、「プロトタイプ効果」とは、カテゴリーのメンバーは均質なものではなく、典型的なものとはそうでないものに分かれ、メンバー間でカテゴリーへの帰属度に程度差が存在していることをいう。

ある語が相互に関連した複数の意味を持っていることを多義性といい、また、そういう語を多義語というが、認知意味論では、多義語を一種のカテゴリー（複数の語義の集合）と考える。したがって、多義語のカテゴリーは、そのメンバーとしての多義語の個々の意味から構成される。例えば、『新選国語辞典』の「ヒト」の項目には次のような意味が挙げられている：

- ① 人類。人間。
- ② 権利・義務の主体である自然人。
- ③ 他人。世間の人。
- ④ おとな。成人。
- ⑤ しかるべき人。優れた人。
- ⑥ 人物、性質、人柄。

つまり、「ヒト」という多義語のカテゴリーでは、上記①～⑥の各語義がカテゴリーのメンバーということになり、カテゴリーを構成するということは、カテゴリーの3つの特徴を示すということになる。したがって、カテゴリーのメンバー（各語義）の間には、典型的な意味（プロトタイプ）とそうでない意味（非・典型的な意味）との違いが存在し（プロトタイプ効果）、全く同一の意味はないが、部分的に類似した意味が混在することによって、カテゴリー全体としての統一を保っている（家族的類似）と考えられる。

このように、一つの語が多義性を獲得することを認知意味論では意味拡張といい、それはカテゴリー拡張の結果生じたものとする（Lakoff 1987；Sweetser 1990；Taylor 1995）。認知意味論では、多義語というカテゴリーは、古典的カテゴリー観の要件を満たすものではないので、そこには中心メンバー（プロトタイプの意味）とそれ以外の周縁的メンバーとが混在する。なお、プロトタイプの意味（基本義）とは、複数の意味の中で最も基本的な意味のことで、意味拡張の起点となる意味であるが、次のような傾向性をもつ（Dirven and Verspoor 1998；初山 2002；瀬戸

2007a；高橋 2010；瀬戸他 2017）：

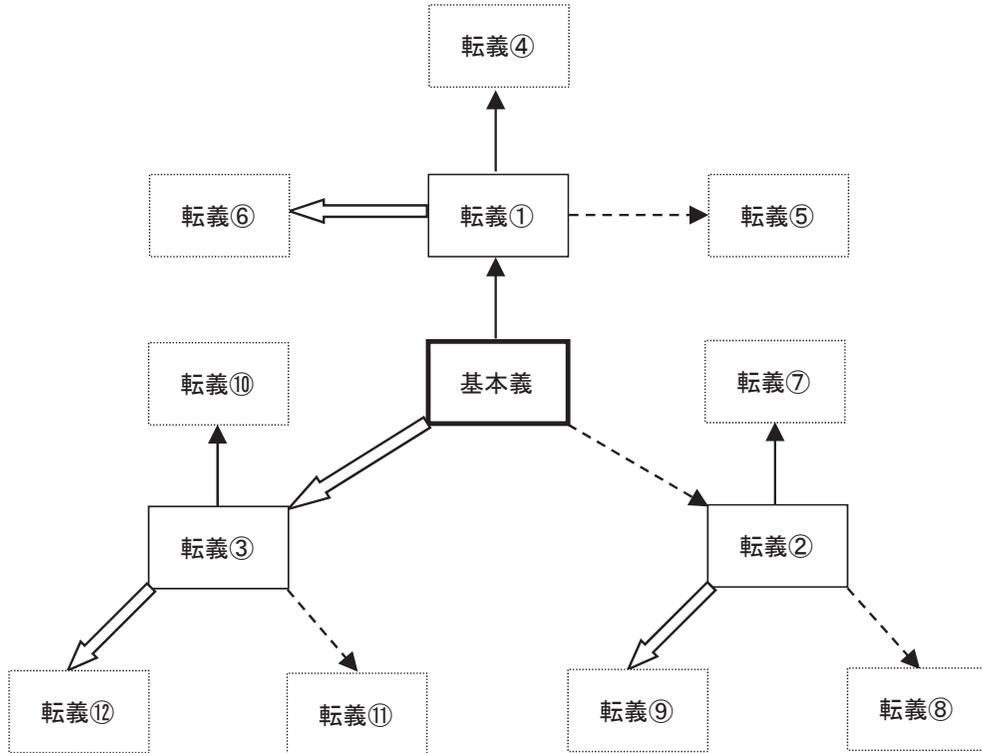
- ① 文脈なしで最も想起されやすく，身体性・具体性が高い文字通りの意味。
- ② 言語習得の早い段階で獲得される意味。
- ③ 他の転義を理解する前提となる，あるいは，他の転義との関連性が自然に説明できる意味。
- ④ 使用頻度が高いことが多い意味。
- ⑤ 慣用表現や比喩で使用されやすい，すなわち，用法上の制約を受けにくい意味。

カテゴリー拡張では，この基本義を起点として「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喩（認知的動機付け）が要因となり，複数の方向へ語義の意味拡張が展開する。これらについて，佐藤（1992），瀬戸（1997），初山・深田（2003），瀬戸（2007a, b），瀬戸他（2017）にしたがって，次のように定義する。

- ①メタファー：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて，一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ②メトニミー：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性に基づいて，一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ③シネクドキ：一般的な意味（類概念）を持つ形式を用いて特殊な意味（種概念）を表す，逆に，特殊な意味（種概念）を持つ形式を用いて一般的な意味（類概念）を表す。

カテゴリー拡張の最も一般的な形態を放射状カテゴリーと呼ぶが，これは，Lakoff（1987）で提示されたモデルで，中心（プロトタイプ）的メンバー（基本義）を2次的（非プロトタイプ）メンバーが取り囲み，その2次的メンバーを中心に，それを3次的な周辺的なメンバーが取り囲む，というように，結果として，幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう（辻 2002：238；辻 2013：340）。図示すると次のようになる（辻 2002：238；瀬戸 2007a：5；瀬戸 2007b：41；瀬戸他 2017；辻 2013：340 を参考に作成）。なお，実線矢印はメタファーに，破線矢印はメトニミーに，二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す：

図1 放射状カテゴリー



上のモデルで、中心に位置する「基本義」が第1次メンバー（プロトタイプ）で、そこから、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、〈転義①〉〈転義②〉〈転義③〉の第2次メンバーへとカテゴリー拡張をしている。さらに、〈転義①〉から、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、〈転義④〉〈転義⑤〉〈転義⑥〉の第3次メンバーへとカテゴリー拡張をしている。〈転義②〉と〈転義③〉からのカテゴリー拡張についても同様である。ただし、これは多義構造の放射状カテゴリーのモデルなので、すべての多義語がこのような意味拡張のプロセスをたどるということではない。

3. 日本語「クウ」の多義構造

3.1 「クウ」の複数の語義

ここでは、「クウ」の複数の意味（語義）の区別を行うが、その際、指針となるのは国語辞典における意味の分類と記述である。以下、3種類の国語辞典の意味の記述を比較する。

(4) 広辞苑（第五版）

- a. 食物を口に入れ、かんでのみこむ。食べる。
- b. 生活する。くらしをたてる。
- c. くわえる。ついでに。
- d. くいつく。かみつく。かむ。また、蚊などが刺す。
- e. しっかりかみあわせる。くいついて離さない。
- f. 傷つける。
- g. (好ましくないことを) 身に受ける。こうむる。
- h. うっかり信じこむ。だまされる。
- i. 相手を飲みこむ意。こばかにして存在を認めない。
- j. 他の領分を侵す。くい入る。
- k. スポーツなどで強い相手を負かす。また、演技などで共演者などを圧倒する。
- l. 金・時間などを消費する。ついやす。
- m. (「としを食う」の形で) かなりの年齢になる。
- n. (演劇用語) 上演脚本の一部を省略する。カットする。

(5) 大辞林（第三版）

- a. 食べ物をかんでのみ込む。食べる。
- b. 生活をする。暮らす。生きていく。
- c. かみつく。また、虫などがさす。
- d. 激しい態度で相手にせまる。
- e. 相手の勢力・領分をおかす。くいこむ。
- f. 上位の者を負かしたり、立場をおびやかしたりする。
- g. 時間・費用などを消費する。
- h. ありがたくない事を身に受ける。こうむる。
- i. 人をばかにする。
- j. 口にくわえる。

(6) 大辞泉（デジタル版）

- a. 食物をかんでのみ込む。食べる。
- b. 生活をする。暮らしを立てる。
- c. 口で物をしっかり捕らえる。食いつく。
- d. 虫などがかじって物を傷める。また、虫などがからだを刺す。
- e. しっかりと間に挟む。また、縄状のものが物にめり込む。
- f. 金銭・時間などがかかる。費やす。
- g. (「年をくう」の形で) かなりの年齢になる。

- h. 他の勢力範囲・領域に入り込む。侵す。
- i. スポーツなどで、強い相手を負かす。
- j. 演劇・映画などで、ある俳優の演技が勝っていて共演者をしのぐ。
- k. 他から、ある行為、特に望ましくない行為を受ける。こうむる。
- l. (「人をくう」の形で) ばかにする。侮る。
- m. 自分の利益のために、だまして人を利用する。食い物にする。
- n. 演劇で、上演台本の一部を省略する。カットする。
- o. 口で軽く挟んで物を支える。くわえる。ついでむ。
- p. かみつく。歯をたてる。
- q. 薬などを飲む。

上記の3種類の辞典の語義の記述について、類似性・共通性の高いものごとにまとめて再整理してみると次のように11通りになる：

- (7) a. 「食べる」「食物を口に入れ、かんでのみ込む」
- b. 「暮らす」「生活する」「生きていく」「暮らしを立てる」
- c. 「虫などがかじって物を傷める」
- d. 「蚊などの虫がからだを刺す」
- e. 「こうむる」「うっかり信じこむ」「だまされる」「(好ましくないことやありがたくない事を) 身に受ける」「他から、ある行為、特に望ましくない行為を受ける」
- f. 「くい入る」「くいこむ」「食い物にする」「他や相手の勢力・領分を侵す」「他の勢力範囲・領域に入り込む」「自分の利益のために、だまして人を利用する」
- g. 「侮る」「相手を飲みこむ」「激しい態度で相手にせまる」「こばかにして存在を認めない」「(「人をくう」の形で) 人をばかにする」「スポーツなどで強い相手を負かす」「上位の者を負かしたり、立場をおびやかしたりする」「演劇・映画などで、ある俳優の演技などが勝っていて共演者などをしのぐ・圧倒する」
- h. 「費やす」「金銭・費用・時間などを消費する」「金銭・時間などがかかる」「(「年をくう」の形で) かなりの年齢になる」
- i. 「かむ」「かみつく」「くわえる」「ついでむ」「食いつく」「傷つける」「歯をたてる」「口にくわえる」「くいついて離さない」「しっかりと間に挟む」「しっかりとかみあわせる」「口で物をしっかりと捕らえる」「口で軽く挟んで物を支える」「縄状のものが物にめり込む」
- j. 「(演劇で、上演台本・脚本の一部を) 省略する・カットする」
- k. 「薬などを飲む」

上記のように、国語辞典の記述を再整理した結果をもとに、「クウ」に対して最終的に次のような8つの意味（基本義と転義）を区別する²⁾。

①基本義〈食べる〉：概念 {食物を，口の中に入れて，嚙んで，飲み込む}³⁾

(8) 実は知り合いに，菜食主義だったけど，ラーメン屋では焼き豚クウし，パーティーの時は肉をクウとか言い出した人がいます。

<http://semiramis.sakura.ne.jp/another1.html>

②転義〈暮らす〉：概念 {人間が，生命活動を維持しつつ，生計を立てながら生活する}

(9) 派遣社員では生涯クッテいけるかどうか。というより途中で解雇されないか不安。50代以降で解雇されたら命取りになりかねない。

<http://musyoku.com/bbs/view/1111474539/100-199>

③転義〈虫が齧る〉：概念 {虫などが，口で紙，衣服，あるいは果樹などに，穴をあける}

(10) 絹や毛製品などは，それ自体が虫の大好きなタンパク質のかたまりですから，保管法によっては虫がクッテしまうことがあります。

<http://www.karakiya.com/tema/tema2.html>

(11) その資料は，昭和10年，まだ，広島市に転居する前の，尾道在住の其阿弥家の当主の其阿弥直次郎氏が，所蔵していた，家系図なる物，古文書の【其阿弥家記録】なる物の調査が行われ，家系図は，つじつまが合わない物であったが，虫がクッテ穴がたくさんある家系図には，三原正家の第6子増守を祖先にしているような，そんな文章であったようである。

<http://blogs.yahoo.co.jp/ddh182isepuramopark/10544691.html>

④転義〈虫が刺す〉：概念 {蚊やダニなどの虫が，人間などの皮膚に，針状の口で傷を付け，血などを吸う}

(12) しかも，憎らしいことに一箇所だけ差さず連続して3，4回と血を吸っていく。団子三兄弟のようにぷっくりとしたノミのクッテ跡が三つ四つ。蚊とは比べ物にならないほど大きく膨れる。

<http://ameblo.jp/gaimusansyu/entry-11471427322.html>

⑤ 転義 〈浪費する〉：概念 {時間やお金などを，予想する以上に無駄に使う}

(13) 釣り，ゴルフ，旅行，金をクウ趣味は山ほどある。本当は必要もない高価な車のために大きな借金したりさ。

<http://fiveslot777.com/archives/39917934.html>

⑥ 転義 〈害を被る〉：概念 {好ましくないことやありがたくないことを，身に受ける，経験する，甘受する}

(14) 戦時中，私は母と佐世保に住んでいた。私はチビで近眼だったので，相手を見上げるポーズだった。佐世保は軍港だったので，街がきりっとしまった感じで，何かと暴力的だった。小学五年生の私は，学校の先生からも，上級生からも，防空壕に連れられ「歯をくいしばれ」と云われてピンタをクッタ。その瞬間，身体全体に火花が散るような痛みがあった。

<http://ameblo.jp/tgby346/entry-11303632737.html>

⑦ 転義 〈圧倒する〉：概念 {スポーツ，演技などで下位の（弱い）者が上位の（強い）者を負かす，やっつける，あるいは，下位の者が上位の者の立場や地位を脅かす}

(15) 外国映画で，脇役なのに主役をクウ演技をしたな！という俳優はいましたか？

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1447453844

⑧ 転義 〈奪取する〉：概念 {他人の取り分や儲けを奪い取る，他人の領域・勢力範囲を侵す}

(16) 以前，アマゾンが日本国内の売上高が7300億円だったことを発表し，サイバーモールと呼ばれるアマゾン，楽天，eBay，ヤフオクなどの電子商店街はこれからも大きく成長を続け，順調に百貨店などの売上をクッていくと思います。

<http://www.9-4.jp/main/>

3.2 「クウ」の意味拡張の動機付け

【第1次拡張】

メトニミー的拡張：基本義①〈食べる〉→②転義〈暮らす〉

「食う＝人間が食べ物を取る」という活動は「人間が暮らす＝生活する」という活動の一部であ

る。つまり、「部分⇔全体」の関係にあると捉えればメトニミーである。

また、「生きるために食料を手に入れて食べる」ことは、「働いて収入を得て生計を立てている」ことに立脚している。つまり、両者の間には密接な関係（＝近接性）があるので、この意味でもメトニミーである。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→③〈虫が齧る〉

「食う」という行為は「食物などを、口から取り入れて、歯で噛む（または、噛まずに飲み込む）ことによって、体内に入れる」ことである。昆虫が「食う」場合に用いる器官は、口と類似した機能を持つ器官なので、それが人間の口という器官とは違っていても、噛む（齧る）器官という類似性、体の中での位置（人間の頭部に当たる部分に付属）における類似性が動機付けとなってメタファー的に意味拡張したと考えられる。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→④〈虫が刺す〉

「食う」という行為は「食物などを、口から取り入れて、歯で噛む（または、噛まずに飲み込む）ことによって、体内に入れる」ことである。昆虫が「刺す」という行為は「口と類似した位置にある器官（針状の口吻）を、人間などの皮膚に突き刺して、血液を体内に入れる」ことである。この類似性が動機付けとなってメタファー的に意味拡張したと考えられる。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→⑤〈浪費する〉

「食う」という行為には、「食う対象」が体内に入ってしまった結果、「その量が次第に減っていく」という現象が伴う。「食う対象を、消費して減少させる」という行為は「時間・お金を、消費して減少させる」という行為と類似しているので、メタファー的に意味拡張したと考えられる。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→⑥〈害を被る〉

「食う」という行為は、人間の生命を維持するために重要な行為である。食う対象になるものは、通常、人間にとって「良いもの」であるが、時として、悪いものを食ってしまう場合もある。「悪いもの」を食った場合、その結果、人間は体に被害を受ける。

この経験には、「悪いもの」が人間の体を攻撃する（害をなす）というイメージが伴う。つまり、「悪いものを食ったことによる被害」と「外部から受けた攻撃による被害」との間に構造的な類似性が認められるので、メタファー的に意味拡張したと考えられる。

なお、この「被害」は「肉体的被害」だけではなく「物理的被害」「心理的被害」「経験的被害」などへとメタファー的に拡張していくが、結局は「人間が受けるなんらかの被害」に集約できる。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉 → ⑦〈圧倒する〉

「食う」という行為は、食う対象の量を減らすだけでなく、「食う対象を噛み砕き、その構造を破壊し、体内に取り入れやすくすること」を含む。「固くて簡単に食えないものを噛んで柔らかくして飲み込む」という行為は、食う対象を「うち負かす=圧倒する」ことに喩えられる。つまり、相手が何らかの「対処の困難さ」を持つ場合、その困難さを克服し「圧倒する」という行為は、「食う」行為と構造が類似しているのでメタファー的に意味拡張したと考えられる。

【第2次拡張】

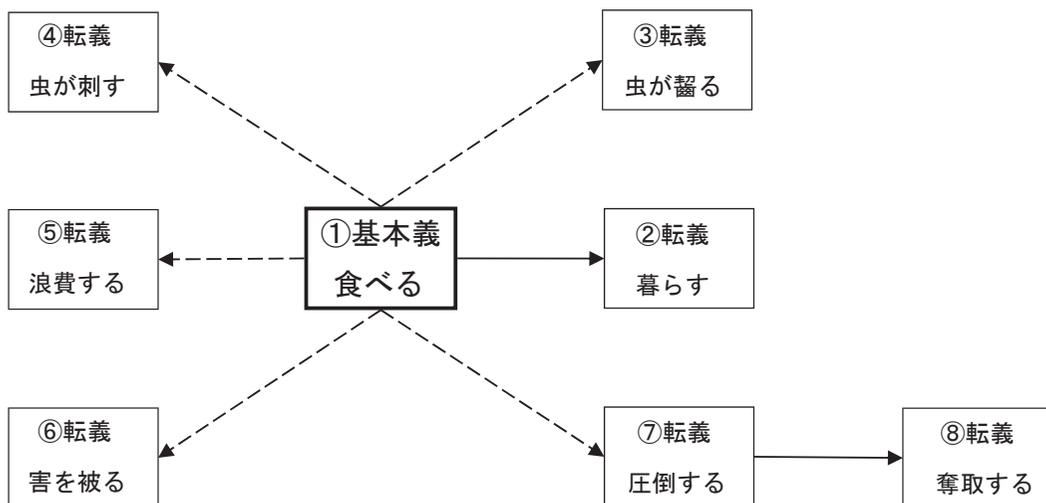
メトニミー的拡張：⑦〈圧倒する〉 → ⑧〈奪取する〉

「相手を圧倒する、打ち負かす（原因）」という行為は、それによって、さらに、相手の生命線となる大切な財産・所有物（領土、利益、既得権など）を「侵害することによって奪う（結果）」ことへとつながる。つまり、メトニミー的に意味拡張したと考えられる。

3.3 「クウ」の意味拡張

上で区別した①～⑧の語義は、基本義とそこから意味拡張の結果生じたさまざまな転義からなる次のような放射状カテゴリーを構成すると仮定できる。なお、下の図2で、破線矢印はメタファーに、実線矢印はメトニミーに動機付けられた意味拡張を表す。

図2 「クウ」の放射状カテゴリー



4. 英語 “to eat” の多義構造

4.1 “to eat” の複数の語義

ここでは，“to eat”の複数の意味（語義）の区別を行うが，その際，指針となるのは英英辞典における意味の分類と記述である。以下，3種類の辞典の意味の記述を比較する。

(17) Merriam-Webster Online

Transitive

- a. to take in through the mouth as food: ingest, chew, and swallow in turn
- b. 1: to destroy, consume, or waste by or as if by eating
2: to bear the expense of: take a loss on
- c. 1: to consume gradually: corrode
2: to consume with vexation: bother
- d. to enjoy eagerly or avidly : lap —used with up
- e. usually vulgar : to perform fellatio or cunnilingus on —often used with *out*

Intransitive

- f. to take food or a meal
- g. to affect something by gradual destruction or consumption — usually used with *into*, *away*, or *at*

(18) American Heritage Dictionary of the English Language

Transitive

- a. 1: To take into the body by the mouth for digestion or absorption
2: To take in and absorb as food
3: To include habitually or by preference in one's diet
- b. To destroy, ravage, or use up by or as if by ingesting
- c. To erode or corrode
- d. To produce by eating
- e. [Slang] To absorb the cost or expense of
- f. [Informal] To bother or annoy
- g. [Vulgar slang] To perform cunnilingus or anilingus on. Often used with out.

Intransitive

- h. 1: To consume food.
2: To have or take a meal.
- i. To exercise a consuming or eroding effect: a drill that ate away at the rock; exorbitant

expenses that were eating into profits.

j. To cause persistent annoyance or distress:

(19) Random House Webster's Unabridged Dictionary

Transitive

a. to take into the mouth and swallow for nourishment; chew and swallow (food) .

b. to consume by or as if by devouring gradually; wear away; corrode

c. to make (a hole, passage etc.) , as by gnawing or corrosion.

d. to ravage or devastate

e. to absorb wastefully; consume (often followed by *up*)

f. [Slang (vulgar)] to perform cunnilingus or fellatio on

Intransitive

g. to consume food; take a meal

h. to make a way, as by gnawing or corrosion

i. be eating someone. Informal, to worry, annoy, or bother

j. to destroy gradually, as by erosion

上記の3種類の英英辞典の語義の記述について、その日本語訳を類似性・共通性の高いものごとにまとめて再整理してみると次のように7通りになる：

- (20) a. 「食事を取る」「食品を食べる」「食べ物や食事を取る」「口に入れ、噛んで、飲み込む」「食品として、口を通して取る」「食品として吸収するために摂取する」「食事として、あるいは好みで常食とする」「消化や吸収のために口から体内に取り入れる」「栄養摂取のため、食品を口の中に入れ、咀嚼して、嚥下する」
- b. 「破壊する」「侵食する」「腐食させる」「荒廃させる」「侵食や腐食によって徐々に破壊する」「消耗させる、または侵食するような効果をなす」「食べるかのように、破壊する、消滅させる、荒廃させる」「徐々に破壊したり、消耗させることによって何かに影響を及ぼす」「食べ物を摂取するかのように、破壊する、荒廃させる、消耗する」
- c. 「悩ませる」「困らせる」「悩ませる」「いらいらの感情にかられる」「持続的な不快感や苦痛を引き起こす」
- d. 「損をする」「損失を負う」「使い果たす」「無駄に奪い取る」「費用や負担を奪い取る」
- e. 「喜ぶ」「心からまたは熱心に楽しむ」
- f. 「口淫などを行う」

上記のように、英英辞典の記述を再整理した結果をもとに、“to eat”に対して最終的に次のよう

な4つの意味（基本義と転義）を区別する⁴⁾。

①基本義〈食べる〉：概念 {食物を，口の中に入れて，嚙んで，飲み込む}

- (21) I love to eat breakfast in the morning and it has to be a quality time. I also think that it's the most important meal of a day. (私は朝に朝食を食べるのが大好きで，それは充実した時間でなければなりません。それは一日で一番大切な食事だとも思うのです)

<http://whatshouldieatforbreakfasttoday.com/>

②転義〈浪費する〉：概念 {お金・モノ・時間などを，予想する以上に無駄に使う}

- (22) My car 'eats' fuel and the cost is a massive factor (replacing the car is not really an option). (私の車は燃料を「食い」ますので費用は大きな要素になります (車を取り換えることは実際には選択肢に入っていないので))

[http://www.mumsnet.com/Talk/education/1797055-Stay-or-move expenses ate up the profits](http://www.mumsnet.com/Talk/education/1797055-Stay-or-move%20expenses%20ate%20up%20the%20profits)

- (23) Most importantly, as the above analysis shows, email eats my time just as it likely eats yours. (一番大事なことは，上の分析でわかるように，電子メールは私の時間を食うということです。あなたの時間を食うのとちょうど同じです)

<https://www.edge.org/response-detail/25359>

③転義〈こわす〉：概念 {食べ物を食べるように，浸食・腐食・火災などが，徐々に何かを消耗する，破壊する，荒廃させる，消滅させる，あるいは，何かに影響を及ぼす}

- (24) 「浸食する」

Erosion can eat away at the shoreline and threaten coastal roads, buildings, and homes.

Reduced sand supply to the coast can exacerbate this process. (浸食作用は海岸線を削り取り，海岸沿いの道路，建物，住宅を脅かすことがあります。海岸の砂が減少するとこの作用を悪化させることがあります)

<https://caseagrant.ucsd.edu/project/explore-sandy-beach-ecosystems-of-southern-california/coastal-armoring>

- (25) 「腐食する」

All acids contain hydrogen, which, in some cases, act like a metal. When an acid "eats" through a metal, the metal atoms replace the hydrogen in the acid, forming bubbles of

hydrogen gas. For example, throwing some aluminum in hydrochloric acid would produce aluminum chloride and hydrogen gas. (全ての酸は水素を含んでいて、場合によっては、金属のようにふるまう。酸が金属を「食べる（腐食する）」とき、金属の原子は、酸の中の水素と置き換わり水素ガスの気泡を形成する。例えば、塩酸の中にアルミニウムを放り込むと塩化アルミニウムと水素ガスが生成されます)

https://www.reddit.com/r/explainlikeimfive/comments/r1f0h/how_can_an_acid_like_hydrochloric_eat_through/

(26) 「全焼する」

Florida's Bugaboo wildfire has eaten nearly 120,000 acres of North Florida's pinelands, and Lt. Kirby Lastinger and others from the Lakeland Fire Department have been on the front lines, making a stand against the inferno that remains only 50 percent contained. (フロリダのバガブーの山火事は北フロリダのパインランドの12万エーカー近くを焼失させ、レイクランド消防署のカービー・ラストインガー隊長補佐以下隊員たちは最前線にいて50%にしか消火されていない地獄さながらの大火災に向かって踏みとどまっていました)

<http://www.theledger.com/article/20070517/news/705170485>

④ 転義〈苦しめる〉：概念 {病氣・けが・心配事などの苦痛が、人を悩ませる、心配させる、弱らせる、衰弱させる}

(27) However, I hate being stressed. Stress eats you from the inside out. Stress makes you feel like you are worth less than you were the day before. (でも、私はストレスを感じるのは嫌です。ストレスは内側からあなたを蝕みます。ストレスがあると前日の自分よりも価値がないような気持ちになります)

<https://medium.com/@danielmarshall/ive-learned-nothing-66424f460ba0#.j62r3st07>

4.2 “to eat”の意味拡張の動機付け

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→②〈浪費する〉

「食う」という行為には、「食う対象」が体内に入っていった結果、「その量が次第に減っていく」という現象が伴う。「食う対象を、消費して減少させる」という行為は「時間・お金などを、消費して減少させる」という行為と類似しているので、メタファー的に意味拡張したと考えられる。

メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→③〈こわす〉

「食う」行為には、「もの（食べ物）をかじることによって、こまかくばらばらにしてなくしてしまう」という行為をとまなう。これは「はじめは整った形をしていたものが腐食，腐敗，浸食などが原因で形が崩れていく」現象とイメージ的に重なる。これは「火や火炎（無生物）が対象物（建物や森林など）を包み込んで焼いて燃えかす（灰）にしてしまう」という現象とイメージ的に重なる。いずれにせよ，浸食，腐食，火災の違いはあれど，「食べるかのように元の形を変えてしまう」というイメージの類似性が見てとれるので，メタファーによる意味拡張である。

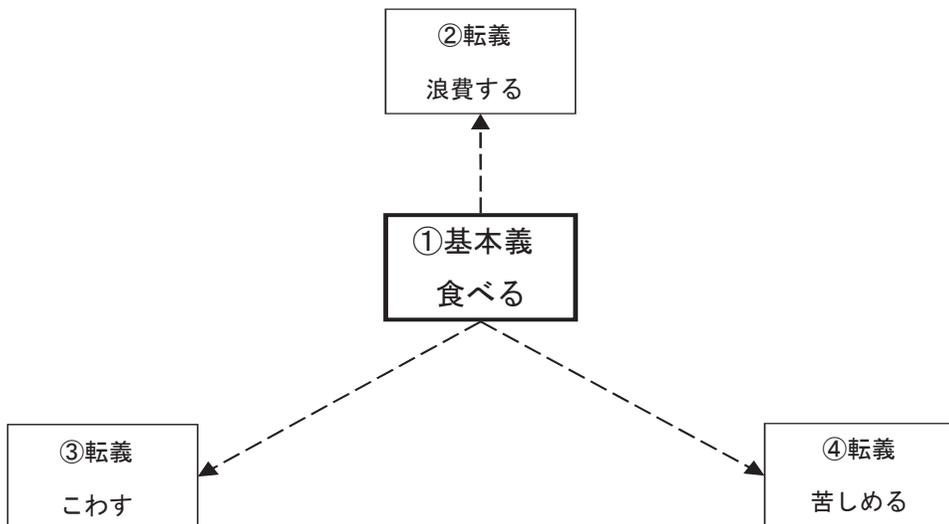
メタファー的拡張：基本義①〈食べる〉→④〈苦しめる〉

「食う」行為には、「もの（食べ物）をかじることによって，こまかくばらばらにしてなくしてしまう」という行為をとまなう。このように，「食われる」ことによって，「ダメージを受ける」ことは，「食べられることによって，自分の身が削られる（苦痛が生じる）」こととイメージ的に重なる。両者の間には類似性が見てとれるので，メタファーによる意味拡張である。

4.3 “to eat” の意味拡張

上で区別した①～④の語義は，基本義とそこから意味拡張の結果生じたさまざまな転義からなる次のような放射状カテゴリーを構成すると仮定できる。なお，下の図3で，破線矢印はメタファーに動機付けられた意味拡張を表す。

図3 “to eat” の放射状カテゴリー



5. まとめ

本論では、日本語と英語の多義動詞「クウ」と“to eat”を対象として、その多義構造について、認知意味論の観点から分析し、対照言語学的考察を行った。その結果、明らかになった主な点は次の通りである：

- ① 「クウ」と“to eat”は多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。
- ② 「クウ」と“to eat”の基本義として、それぞれ〈食べる〉を仮定するのが妥当である。
- ③ 「クウ」と“to eat”とに共通する転義としては、〈浪費する〉がある。
- ④ 「クウ」だけに見られる転義として〈暮らす〉〈虫が齧る〉〈虫が刺す〉〈害を被る〉〈圧倒する〉〈奪取する〉がある。
- ⑤ “to eat”だけに見られる転義として〈こわす〉〈苦しめる〉がある。

最後に、「クウ」と“to eat”はそれぞれ多義語ではあるが、意味拡張の結果派生した転義に関しては、「クウ」の方が“to eat”よりもはるかに多様性に富んでいた。意味拡張の動機付けに関しても、「クウ」の方がメタファーとメトニミーの影響を受けていたが、“to eat”はメタファーだけであった。シネクドキによる意味拡張は「クウ」にも“to eat”にも見られなかったが、それぞれの動詞本来の意味に起因すると思われるが、ここでは論じないことにする。

注

- 1) 本論は、語の意味に関する研究であるので、自動詞と他動詞の違いは、統語論的な違いに過ぎないという立場を取り、「自他一体記述」を行う。これについて、瀬戸（2007：7-8）は「英和辞書は、一般に、自動詞と他動詞を分離して記述する。自動詞と他動詞の区別は、外国語としての英語の学習には必須の情報だとの教育的判断が背後にあると推測される。他方、海外の英英辞典、とりわけ教育的な配慮から編集された学習英英辞典は、こぞって自他を一体記述する。この判断の違いはどこからくるのだろうか。たとえば、eatの自他に着目してstart eating (breakfast)の表現を見ると、breakfastのあるなしは、目的語が明示されるか否かの違いだけであり、「食事をする」というeatの意義に大差はない。にもかかわらず、英和辞典は、他動詞の「食事をする」と自動詞の「食事をする」を、まるでまったく無関係であるかのように遠く離して別個に記述する。意義のまとまりと関連を体系的に記述するという目的からすれば、このような事例は、自他を一本化して記述するのが望ましい」と言う。
- 2) (10i)の「かむ」「かみつく」…などの語義は、やや古風と思われ、(10j)の「省略する・カットする」は演劇用語であり一般性に欠け、(10k)の「薬などを飲む」は使用頻度が低いと思われるので、今回の分析では除外した。
- 3) 本論では、意味の記述に2つのレベルを設ける。一つは、「語義」で〈…〉で囲んで表す。もう一つは、「概念」で{|…|}で囲んで表す。「語義」と「概念」は、それぞれ語の意味の一側面を構成する。「語義」は、語の意味をなるべく簡潔に、ワンフレーズで収まるようにまとめた記述である。「概念」は、語の意味をなるべく、具体的に、詳細に、百科事典の意味をも交えて、まとめた記述である。
- 4) 再整理した語義のうち、(20e)の「喜ぶ」「心からまたは熱心に楽しむ」の意味は、ウェブ上で該当する用例が

少なく、やや一般性が低いと思われる、(20f)の「口淫などを行う」の意味は、俗語・卑猥語に属するものであるので今回の分析では除外した。

参考文献

- Labov, William(1973)“The Boundaries of Words and Their Meanings,” In: C.J.N. Bailey and R.W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*, 340-373. Washington: Georgetown University Press.
- Lakoff, George(1987)*Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Rosch, Eleanor(1975)“Cognitive Representations of Semantic Categories,” *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫（1992）『レトリック感覚（講談社学術文庫）』東京：講談社。
- 瀬戸賢一（1997）「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』（日英語比較選書①）94-177. 東京：研究社。
- 瀬戸賢一（編）（2007a）『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館。
- 瀬戸賢一（2007b）「メタファーと多義語の記述」楠見孝（編）『メタファー研究の最前線』31-61. 東京：ひつじ書房。
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望（2017）『[認知言語学演習②] 解いて学ぶ認知意味論』東京：大修館書店。
- Sweetser, Eve(1990)*From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, John R.(1995)*Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫（2002）『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社。
- 辻幸夫（2013）『新編 認知言語学キーワード辞典』東京：研究社。
- Wittgenstein, Ludwig(1978)*Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

参照国語辞典

- 『大辞林』（三省堂，第三版）
『大辞泉』（小学館，デジタル版）
『広辞苑』（岩波書店，第五版）

参照英英辞典

- American Heritage Dictionary of the English Language（第5版）
Merriam-Webster's Dictionary（ウェブ版）
Random House Webster's Unabridged Dictionary（第2版）

例文検索ウェブサイト

<https://www.google.com/>